

Barbara Luisi ©BALU Photography

インタビュー

ファビオ・ルイーシが語る
オーケストラとの音楽作り

8月24、25日に東京と横浜で開かれる《読響サマーフェスティバル2017 ルイーシ特別演奏会》で、イタリアの世界的指揮者ファビオ・ルイーシさん(58)が、リヒャルト・シュトラウスの交響詩〈ドン・ファン〉、ハイドンの交響曲第82番〈熊〉、R.シュトラウスの交響詩〈英雄の生涯〉の3曲を披露する。意外にも読響には初登場。意気込みを聞いた。

(読売新聞文化部記者 岩城 撰)

——読響とは初共演です。

「読響と共演した経験のある友人からは、大変レベルが高く経験豊かなオーケストラと聞いています。私も好奇心でいっぱいです」

——プログラムの狙いは。

「私のレパートリーの中核であるドイツ後期ロマン派からまず選びました。〈英雄の生涯〉の組み合わせには、対照的な方向性で〈ドン・ファン〉。ウィーン古典派も大好きで、多くの宝物を残したハイドンから、お気に入りの〈熊〉を演奏します」

——初顔合わせで難曲のプログラム。刺激的な演奏を期待したい。

「この重厚なプログラムは、私にとってもチャレンジング。特に〈英雄の生涯〉は、私が初めて指揮したR.シュトラウス作品で、魅了され続けています。オーケストラには卓越した技術が求められ、とにかくソロを弾く素晴らしいコンサートマスターがいないと話になりません。

この曲は色彩が大変豊かで、作曲家が自らの人生を投影して表現しています。華々しさが注目されがちですが、むしろ内省的で絶望的な瞬間もあり、最後まで『迷い』の姿がうかがえます。終結部は、よく知られる大仰な終わり方ではなく、オリジナル版を採用し、

自分の人生の内側を静かに見つめて振り返る老人の姿を描きます。それがR.シュトラウスが本来望んだものだと思うのです」

——マエストロの音楽作りは、フィルハーモニア・チューリヒと2015年に録音したブルックナーの交響曲第8番のように、骨太な楽曲にも細部にまるやかさが宿る。

「ブルックナーは最も敬愛する作曲家です。特に第8番は、あらゆる交響曲の中で頂点をなす作品だと信じています。構築性や壮大さが強調されますが、歌のような旋律的な部分が重要です。それは楽器の選択や管弦楽法にも表れていて、歌の要素が必ず含まれるブルックナー作品を、いかに本来のあべき姿で届けるかに最も心を砕いています。その点、私がイタリア人であることが影響しているかどうかは、自分では分かりませんが」

——指揮者としてオーケストラとの向き合い方は。

「一番大切なのは、パートナーシップを築くこと。命令をする立場の人間ではなく、演奏家と一緒に共通の目的に向かって一つの道を歩みたい。客演であろうと首席指揮者であろうと、姿勢は変わりません」

——世界中のオーケストラの音が似通ってきて、個性の喪失も指摘される。「没個性は部分的にそうだと思います

す。グローバル化が進み、演奏家が他国で学ぶことが容易になりました。演奏家のレベルが非常に向上した反面、習得したものがそれぞれのオーケストラに持ち込まれ、個性の喪失に繋がっていてもいます。対抗策の一つは、首席指揮者が響きやレパートリーに確固とした理念を持ち、特定の様式を追求すること。例えば、スカラ座のオーケストラがオペラを演奏したら、間違いなくスカラ座の響きがあります。ジュリーニさん、アバドさん、ムーティさん……と、音楽監督が変わっても、その個性は間違いなく安定し、培われた様式が機能するのです」

——音楽家人生で重要な転機は。

「すべての新たな体験が私を成長させてくれます。中でも1989年は重要な年で、ウィーン、ミュンヘンの国立歌劇場などにデビューできました。95年、私が初めてオーケストラの首席指揮者になったウィーン・トーンクンストラ管弦楽団では、R.シュトラウス、ブルックナー、マーラーの作品をレパートリーとして身に付けることができ、貴重な経験でした」

——華々しい経歴だが、挫折を感じたことは。

「ないですね。私は非常にプラス思考なので。あまり幸せを感じない瞬間もありますが、音楽は私を助け、幸福感や達成感をもたらしてくれる源です」

夏の特別対談

鈴木優人×岸田 繁

Masato Suzuki

Shigeru Kishida

夏休み特別企画として、現在、エッセーを連載中のロックバンド「くるり」のフロントマン（ボーカル、ギター）、作曲家の岸田繁さん（写真左）と、今月の《三大交響曲》公演を指揮するチェンバロ・オルガン奏者、指揮者の鈴木優人さんをお招きし、クラシックの魅力について語り合っていました。ジャンルを超えた「音楽の魂」の響きあいをお楽しみください。



ソウル・ミュージックとしての交響曲

—岸田さんは自作の交響曲第一番のCD（ビクターエンタテインメント）を出されたばかりです。どのように作曲されたんですか。

岸田 僕はアカデミックな作曲の勉強をしていないので、頭の中で鳴っている音をまずMIDIのピアノロールを使って、オーケストラのパートごとに順番に録音しました。それをアレンジ

ーさんに渡して、「できるだけイメージを崩さずに、クラシック的にここは絶対怒られるというところだけ教えて」と言って（笑）。それでちょっとずつ直して、自分が思っている音楽に近い譜面にしていってました。それが実際の演奏でどうなるか、初演前は怖くて仕方なかった。でも、僕が書いたシンフォニーを、広上淳一先生指揮の京都市交響楽団に魂を込めて弾いていただき、とても感激しました。

—交響曲第一番は岸田さんにとつ

てソウル・ミュージックなんですね。岸田 音楽はひとつの世界観の提示だと思います。聴き手も含めたパッション（感情）を取り込むことで成立するタイプの音楽、それがソウル・ミュージック。僕にとって音楽とはすべてソウル・ミュージックなんです。

—鈴木さんにとってのソウル・ミュージックは古楽ですか。

鈴木 人からそう言われることもあります。でも、その前に音楽のジャンルの違いについて言わせてください。例えば指揮者と一口に言っても、武闘派とか温厚な人とかいろんなキャラクターの人がいますよね。僕にとっては音楽のジャンルの違いより、音楽家のキャラクターの違いの方が重要なんです。

—岸田さんから見て、クラシックの演奏家はアーティストですか？それともアルチザン（職人）？

岸田 アーティストなのか職人なのかは、あまり意識しないですね。ジャンルによって違うでしょうが、例えばアーティストっぽい豆腐屋さんがいたり、職人っぽい野球の2番バッターがいたりとか、そういうことだと思う。それより、最近では情報があふれていますから、何かにつけて説明書がどんどん分厚くなる。その方が問題です。

—古楽のジャンルは、とりわけ説

明書が多いのでは。

鈴木 古楽をやる人というのはもともと知的な好奇心が強いので、本来どうだったのかという興味から入る人は多いですね。しかし、レオンハルトやブリュッヘン、アーノンクールといった古楽の大御所は、実は音楽の生の体験、ライブ感を重視していたのです。それがなくなると古楽はつまらないですから。

魂を売ってもいいと思わせる指揮

—ところで「ヘタウマ」って、クラシックでは成立しにくいと思いませんか。

岸田 演奏テクニックというものは、指がどれだけ速く動くかとか、どれだけ情感を込めているかのように弾けるかとか、そういうことでしかない。テクニックの追求に関しては、僕も視野きょうさくが狭きょうさくになってしまふところがあって、全然違うジャンルの音楽に常に目を向けていないと、すぐにとらわれてしまう。

鈴木 指揮者の仕事というのはとにかく楽譜にがんじがらめになっていて、魂なんて許されていない（笑）。でも、スコアだけ見ているとダメなんです。オーケストラの現場で一瞬、魂を売ってもいいかなと思わせるような景色をみんなに見せないと。



すずき・まさと 1981年オランダ生まれ。チェンバロ・オルガン奏者、指揮者。調布国際音楽祭エグゼクティブ・プロデューサー。

— これからのクラシック演奏に最も必要なものは何でしょうか。

岸田 音楽を聴いた時に、いま、ここにある「何か」に例えられることが大事だと思います。うまく説明できないんですが、いま、ここにある雰囲気、自然現象のような感覚を、ずっと昔の音楽の中に発見できると、自分の中ですごくつじつまが合う。

— では、クラシック演奏はどの程度、同時代性を持ちえるのでしょうか。

鈴木 ライブで音を作っているという意味では、同時代的だと思います。すでに完成された楽譜であっても、それを演奏者が見て、あらためて弾いてもらうところに価値がある。ライブが大

事という話とも結びつきますが、そこに再創造があるから同時代的なんです。だから、僕自身はクラシック演奏家とは思っていない。ハイドンを演奏しても、ハイドンの時代そのものには興味がない。歴史的なものに興味を持つことはあっても、演奏している瞬間ではないですね。

魂がウソをつかない限り、 わかってくれる

— クラシックには厳しい約束事もありますね。

鈴木 僕はそういう約束事ってたくさんあるように見えて実はあまりないんじゃないかと思っています。なぜなら音楽の約束事って時代と共に変わっていくものだから。

岸田 いったん音楽の中に没入すれば、スタイルはどうでもよくなります。楽しければそれでいいじゃないかと。僕が知っているクラシック演奏家の方って、みんな自由な人が多い。むしろロックをやっている人の方が、約束事についてはガチガチですね。一方で僕は「壁を壊す」なんて、そう軽々しく言えることではないと思う。それを何が何でも壊さないといけない、という思い込みはない。しかし、何らかの理由で崩れそうになっているところをポンと叩いたらどうなるのかな、という興味はあります。

鈴木 クラシックのお客さんは、あえて壁を聴くために来ているようなところがありますが、壁にはありがたい面もあって、見たくないものを見えなくさせてくれる。すべての壁が崩れたら、あまり気持ちのいい世界ではないかも。

岸田 僕にとって音楽を聴く時の理想は、まったく知らない曲を初めて聴く時のドキドキ感なんです。逆に言えば、誰もが知っている曲を「ほんまはこうなんですよ」とドンと打ち出すことができれば、お客さんは喜ぶでしょう。「実はこうやったんや！」という発見ほど強いものはない。僕らはこれまで予定調和的な音楽に反逆しまくってきたので、失敗も多いし、お客さんの期待を裏切ったこともある。でも、インプロヴィゼーション（即興）ではないけれど、常に新曲だと思わせるような演奏ができれば、その方が楽しい。

鈴木 でも、それって聴き手次第なので、どうなるかはわからないでしょう？

岸田 格好つけて言うと、「魂がウソをついていない限り、お客さんはわかってくれる」。そこに懐疑心を持ち始めると、この仕事はできないです。

鈴木 すばらしい。クラシックの壁は、まさにそこですよ。作曲にしても、まず完璧なエクリチュール（書法）を目指す。それは大事なことです、完



きしだ・しげる 1976年京都市生まれ。ロックバンド・くるりのボーカル、ギター／作曲家。京都精華大客員教員。

壁な譜面なんて書けないので、そこにこだわると、それが壁になる。演奏も同じです。完璧な演奏ができないなら、やめようという話になりかねない。

岸田 懐疑心を持つことは必要だと思います。でも、音を出している時にそれを考え始めると音が濁ってしまう。できるだけ迷いなく、初心のまま突っ走ってしまいたい。面白いギャグを思いついた時、いったん頭で考えてから口にする、人は笑ってくれへんでしょう？ テンポ感が大事なんです。音楽を心から楽しみたいという思いにブレがなければ、聴き手も感動すると思います。（聞き手・事務局）

イングリッシュ・ホルン
奏者対談

浦 丈彦 × 北村貴子

Takehiko Ura

Takako Kitamura

印象的なメロディーで会場をふわりと包みます

8月の演奏会にはドヴォルザーク〈新世界から〉に、R. シュトラウス〈英雄の生涯〉と、イングリッシュ・ホルンの活躍する名曲がそろいます。読響の名手、浦丈彦さんと北村貴子さんに、楽器の魅力などを語り合ってもらいました。

「イングリッシュ・ホルンはオーボエの2番奏者が担当する場合が多い。だが同じ木管楽器でも、性格はオーボエとかなり違う」

浦 楽器の音色が穏やかなんで、自分の感じているものをそのまま素直に出せばいい。オーボエやクラリネットは空間を突き抜けて響くけど、イングリッシュ・ホルンの音は空気にくるまれて運ばれ、ふわっと広がる感覚が強い。ある意味、オーボエの厄介なストレスから解放されるところがありますね。

北村 そうそう。オーボエのように直接パーンと表現が出ていかないので、もっと溜めながらやりたいことを音に乗せていける。オーボエよりも少し大らかでいて、ものすごくおいしいソロが一杯ある楽器なんです。作曲家が魅

力を感じて書いてくれたと思われる名旋律が多いし、牧歌的で羊飼いのイメージがあるんですね。

「国によって呼び名も変わる。イングリッシュ・ホルンは、もちろん英語表記だ」

浦 フランス語のコール・アングレが自分にはぴったり来ます。軽い感じの音色が好みで、音を自在に操り自然に動かすのが、自分の演奏スタイルの目標なので。いまの楽器も「リゲータ」というフランス製です。

北村 私にハマるのはドイツ語のエンゲリッシュ・ホルンですね。なので楽器もドイツ製の「ピュヒナー」。ドイツ留学で習った先生はバイロイト音楽祭のピットの常連で、ぼわーっと地の底から鳴るような音色でした。そんな陰りのある音が好きです。

「読響の両名人も、持ち味は異なる」

北村 だから、私は浦さんの演奏に憧れるんです。すごく繊細で音がふわっと伸びていく。それなのに男らしさもあって、かっこいいんですよ。内に秘めたものがにじみ出てくるようで。



浦 そんなふうには言われたことなかったなあ(笑)。僕は北村さんの包容力ある音に惹かれますよ。たぶん母性から来ているんでしょう、ああいう温かい音って出せないんですよ。

「イングリッシュ・ホルン奏者にとって、最も重要な作品のひとつがドヴォルザークの〈新世界から〉だ」

浦 あのメロディー(「家路」)は下校時間によく流れていますから、聞こえた瞬間、お客さんは人生それぞれに、心に風景を思い浮かべていると思うんです。そうすると、ミスしたら人の過去の思い出まで壊してしまいそうな恐怖がある。

北村 極端に言えば、〈新世界〉というと、あのメロディーを聴きにいらっしゃるわけですからね。

浦 第2楽章が始まり、ソロの前に弦

が入ると、自分の周りの空気がふっと浮くんです。そこへ水の上に絵の具をポンと垂らして、ふわっと広がる感覚で音を出さないといけない。映像でいうと夕焼け、またはセピア色なんです。北村 私は聴きにきた方、全員のお母さんになったつもりで語りかけて、いろんな心配をするんですよ。お腹は空いていないかな、とか、寒くないかな、とか(笑)。なるべく客席を包みこもうと思って音を出します。

浦 いやー、そこの差かなあ(笑)。

「R. シュトラウス〈英雄の生涯〉では曲の最後、主人公の英雄が引退し人生を完結する場面で、寂寥感にあふれた長いソロがある」

北村 あそこって、タムララーと音が下りるところが技術的にも難しい。引っ掛からないよう、どうやるか気になっちゃう。オーディションの課題にも、よく出ますし。

浦 長くて苦しくて、どこで息を吸うかがポイント。奏者には大変な曲ですよ。でも、あのソロは、この楽器の音をもっともナチュラルに響く部分で、自分の今の演奏状態を測る格好の題材だと思っています。

「8月の公演は、どちらがご担当ですか」

北村 えーと、2曲とも私ですね。

浦 今年は北村さんへ丸投げの年なんです(笑)。

U pcoming concert schedule

今後の公演案内

ポーランドの名匠カスプシクが〈展覧会の絵〉で渾身のタクト

9/1 (金) 19:00 第605回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ヴァインベルク：ポーランドのメロディ
フィリップ・グラス：ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲
ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲〈展覧会の絵〉

指揮：ヤツェク・カスプシク
ヴァイオリン：ギドン・クレーメル チェロ：ギードレ・ディルヴァナウスカイト

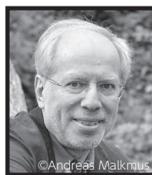


ヤツェク・カスプシク

世界的ヴァイオリニストのクレーメルが31年振りに登場

9/6 (水) 19:00 第571回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

ヴァインベルク：ヴァイオリン協奏曲 ショスタコーヴィチ：交響曲 第4番
指揮：ヤツェク・カスプシク ヴァイオリン：ギドン・クレーメル



ギドン・クレーメル

欧州で注目を浴びる新鋭マイスターと天才トリフォノフが共演！

9/16 (土) 14:00 第200回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/17 (日) 14:00 第200回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/18 (月祝) 14:00 第98回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

スッペ：喜歌劇〈詩人と農夫〉序曲 プロコフィエフ：ピアノ協奏曲 第2番
ベートーヴェン：交響曲 第6番〈田園〉

指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者） ピアノ：ダニール・トリフォノフ



コルネリウス・マイスター

“チーム長原”が繰り広げる極上のアンサンブル

9/19 (火) 19:30 第15回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00開演 **完売**

《長原幸太らによる室内楽》ベートーヴェン：交響曲 第8番（弦楽五重奏版）
ブラームス：弦楽六重奏曲 第1番

ヴァイオリン：長原幸太（コンサートマスター）、瀧村依里（首席） ヴィオラ：鈴木康浩（ソロ・ヴィオラ）、渡邊千春 チェロ：高木慶太、富岡廉太郎（首席／契約団員）



長原幸太

練達のマエストロが振る〈新世界〉&実力派・小山が弾く〈皇帝〉

9/30 (土) 15:00 第6回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール **完売**

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ハンスイェルク・シェレンベルガー ピアノ：小山実稚恵



ハンスイェルク・シェレンベルガー

9月 公演の聴きどころ

9月1日の《名曲シリーズ》では、世界的ヴァイオリニストのクレーメルが31年振りに読響に客演。自ら見出したリトアニア出身のチェリスト、ディルヴァナウスカイトとともに、ミニマル・ミュージックの大家フィリップ・グラスの二重協奏曲を日本初演する。また、名門ワルシャワ・フィルの音楽監督を務めるポーランドの名匠カスプシクが登場し、ムソルグスキー（ラヴェル編）〈展覧会の絵〉で輝かしいサウンドを響かせる。

6日の《定期演奏会》は、クレーメルが近年最も力を入れているという、ポーランド出身でソ連に亡命した作曲家ヴァインベルクのヴァイオリン協奏曲を日本初演する。プログラム後半は、カスプシクが得意のショスタコーヴィチ作品から、とりわけ大きい編成の交響曲第4番を指揮。渾身のタクトが生む、凄味ある迫真の熱演に期待が高まる。

16、17日の《マチネーシリーズ》、18日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》には、今年4月から読響首席客演指揮者に就任したマイスターが登場。ウィーン放送交響楽団の音楽監督として本場で培った実力を携え、ベートーヴェンの交響曲第6番〈田園〉をみずみずしく聴かせる。また、チャイコフスキー国際コンクールに優勝し第一線で活躍するピアニスト、トリフォノフが共演。先鋭な曲想がダイナミックに炸裂するプロコフィエフのピアノ協奏曲で、度肝を抜くテクニックと豊かな表現力を存分に発揮するだろう。

19日は室内楽などをお届けする《読響アンサンブル・シリーズ》。昨年度も好評を博したコンサートマスターの長原幸太が率いる「チーム長原」が再登場する。ベートーヴェン&ブラームスで熱いパッションをほとばしらせる。

30日は《パルテノン名曲シリーズ》。元ベルリン・フィルのソロ・オーボエ奏者で近年は指揮者としても活躍中のシェレンベルガーが、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番〈皇帝〉&ドヴォルザークの交響曲第9番〈新世界から〉という、二つの名曲を振る。〈皇帝〉では、国内屈指の人気ピアニスト小山実稚恵が、華麗な独奏を披露する。

（文責：事務局）

読響チケットWEB

検索

※2017年度の名曲シリーズ、定期演奏会はサントリーホール
の改修工事に伴い、4～9月は東京芸術劇場で開催します。

20世紀を代表する傑作オペラ、遂に全曲日本初演!

11/19 (日) 14:00 第572回 定期演奏会
サントリーホール

完売

11/23 (木祝) 13:00 メシアン: 歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉
(びわ湖ホール・読響 共同主催) びわ湖ホール 大ホール

11/26 (日) 14:00 第606回 名曲シリーズ
サントリーホール

完売

メシアン: 歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉
(演奏会形式/全曲日本初演)

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

天使: エメーケ・バラート (ソプラノ)

聖フランチェスコ: ヴァンサン・ル・テクシエ (バリトン)

合唱: 新国立劇場合唱団、びわ湖ホール声楽アンサンブル ほか



シルヴァン・カンブルラン

伝説的ドラマーが登場する〈ドラムス協奏曲〉& 名曲〈ボレロ〉

12/2 (土) 14:00 第201回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/3 (日) 14:00 第201回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

バーンスタイン: 〈キャンディード〉序曲

ターネジ: ドラムス協奏曲〈アースキン〉 (日本初演)

ガーシュイン: パリのアメリカ人

ラヴェル: ボレロ

指揮: ディエゴ・マテウス

ドラムス: ピーター・アースキン



ディエゴ・マテウス



ピーター・アースキン

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター
(10:00~18:00/年中無休) 0570-00-4390
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

こんなに便利! 読響チケット WEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身で好みの座席をお選びいただけます。以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※ 初回お申し込み時は利用登録 (無料) が必要です。

小森谷巧ら精鋭が繰り広げる渾身のアンサンブル

12/4 (月) 19:30 第16回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《小森谷巧率いる精鋭の豊潤なブラームス》

ブラームス: スケルツォ (F. A. E. ソナタ)、ピアノ三重奏曲 第2番
弦楽六重奏曲 第2番

ヴァイオリン: 小森谷巧 (コンサートマスター)、小杉芳之

ヴィオラ: 柳瀬省太 (ソロ・ヴィオラ)、森口恭子

チェロ: 遠藤真理 (ソロ・チェロ)、渡部玄一 ピアノ: 須関裕子



小森谷巧

マイスターのタクトが描く壮大なマーラーの宇宙

12/12 (火) 19:00 第573回 定期演奏会
サントリーホール

マーラー: 交響曲 第3番

指揮: コルネリウス・マイスター メゾ・ソプラノ: 藤村実穂子

女声合唱: 新国立劇場合唱団 合唱指揮: 三澤洋史

児童合唱: TOKYO FM 少年合唱団、フレーベル少年合唱団



コルネリウス・マイスター

名匠クリヴィスが〈第九〉を指揮。年末に響く“歓喜の歌”

12/17 (日) 14:00 第202回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/19 (火) 19:00 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール

12/20 (水) 19:00 第607回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/21 (木) 19:00 第18回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

12/23 (土祝) 14:00 第202回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/24 (日) 14:00 第99回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ベートーヴェン: 交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮: エマニュエル・クリヴィス

ソプラノ: インガー・ダム=イエンセン

メゾ・ソプラノ: 清水華澄

テノール: ドミニク・ヴォルティヒ

バス: 妻屋秀和

合唱: 新国立劇場合唱団 合唱指揮: 三澤洋史



エマニュエル・クリヴィス



インガー・ダム=イエンセン



清水華澄



ドミニク・ヴォルティヒ



妻屋秀和

新国立劇場 開場20周年記念公演〈神々の黄昏〉

■ 10/1 (日) 14:00、10/4 (水) 16:00、10/7 (土) 14:00、
10/11 (水) 14:00、10/14 (土) 14:00、10/17 (火) 16:00

新国立劇場オペラパレス

指揮：飯守泰次郎

演出：ゲッツ・フリードリヒ

出演：ステファン・グールド、ペトラ・ラング、島村武男、
アントン・ケレミチェフ、アルベルト・ペーゼンドルファー、
安藤赴美子、ヴァルトラウト・マイヤー ほか

ワーグナー：楽劇〈ニーベルングの指環〉第3日〈神々の黄昏〉
(全3幕・ドイツ語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥27,000 A ¥21,600 B ¥15,120 C ¥8,640 D ¥5,400

[お問い合わせ] 新国立劇場ボックスオフィス 03-5352-9999

パルテノン&読響 ファミリーコンサート2017

～オーケストラと巡る世界旅行～

■ 10/9 (月・祝) 15:00 パルテノン多摩 大ホール

指揮：松村秀明

ビゼー：歌劇〈カルメン〉より“アラゴネーズ”“間奏曲”“闘牛士”

メンデルスゾーン：〈真夏の夜の夢〉より“結婚行進曲”

チャイコフスキー：バレエ音楽〈くるみ割り人形〉より“花のワルツ” ほか

[料金] 一般 ¥2,500 学生 ¥1,000 小・中・高校生 ¥500

[お問い合わせ] チケットパルテノン 042-376-8181

NISSAY OPERA 2017 オペラ〈ルサルカ〉

■ 11/9 (木) 13:30、11/11 (土) 13:30、11/12 (日) 13:30

日生劇場

指揮：山田和樹

演出：宮城聡

出演：田崎尚美、樋口達哉、清水那由太、清水華澄 ほか (9日、12日)
竹多倫子、大槻孝志、妻屋秀和、与田朝子 ほか (11日)

ドヴォルザーク：歌劇〈ルサルカ〉(全3幕・チェコ語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000 学生 ¥3,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111